



肝ぞう通信

2023年度 第2号 《肝がんの化学療法について》

お知らせ

肝疾患医療センターは、肝疾患に関する心配事や悩み事のご相談にお応えしています。

当院では、総合相談室が窓口になっております。

場所：病院1階
総合相談室

受付時間：

平日 9:00～15:00

土曜日 9:00～12:00

(第2・4土曜日除く)

豆知識

肝がんの化学療法は、数年間に急速に進歩しています。化学療法の治療効果をあげるうえで、患者さんご自身の副作用の観察と、早期の医療者への相談が重要です。

次回号

テーマ：

自己免疫性肝炎

発行責任者

東海大学医学部付属病院

肝疾患医療センター長

加川 建弘

肝がんの化学療法の進歩

2009年に初めて切除不能・局所療法無効の進行肝細胞がんに対する化学療法が登場してから、2023年6月現在までに7種類の分子標的薬による治療が保険適用になっています。どの治療も肝機能が良い方（チャイルド・ピューA）が治療可能な条件です。

◆分子標的薬はがんの特徴的な蛋白などを狙い撃ちして、がんの増大・血管新生などを抑制するお薬です。現在は①免疫チェックポイント阻害薬併用療法が第一選択で、②点滴と③内服の分子標的薬は第二選択以降となっています。

◆分子標的治療は、外来で行われ、実際にあらわれる副作用症状は個人差があります。そこで、患者さんやご家族がご自宅で副作用症状を観察して、医師や看護師へ気軽に質問や相談できることが、治療効果を上げるうえでとても大事になってきます。

①免疫チェックポイント阻害薬併用療法（アテゾリズマブ：テセントリク®+ベバシズマブ：アバスチン®、デュルバルマブ：イミフィンジ®+トレメリマブ：イジウド®）

いずれも点滴の治療になります。全身の免疫力を高めてがん細胞を攻撃するため、頻度は低いですが、全身に免疫による副作用がでる可能性があり、重篤化するおそれもあります。このため、問診や定期的な検査により、早期発見・早期対応を多職種・多診療科で行います。

少しの変化でも医師、看護師に伝えてください。